令和5年度 No.9

駒岡小学校だより

１月号

変化の激しい時代を生きる

校長　岸田 薫

あけましておめでとうございます。令和6年が始まりました。今年もよろしくお願いいたします。

令和6年と聞いて、「十年一昔」と言うのだから、「令和」もすでに最初の10年の折り返しを過ぎたのだなぁ、などとしみじみ思っていましたが、どうやら最近は「十年一昔」どころではないのだそうです。「十年一昔」というのは、「10年たてば昔のことといえる。世の移り変わりの激しいことを、10年を一区切りとしていう語。（スーパー大辞林3.0 三省堂 2006-2008）」という意味の言葉ですが、現代では、5～6年で「一昔」になってしまうとか…。だとすると、「令和」自体のスタートも、すでに「昔」のことになってしまっているのかもしれません。

さて、昨年は、突然やってきた「コロナ禍」がようやく落ち着きを見せ、令和5年5月8日から「5類感染症」となりました。様々な生活様式の変化・制限の中、「よかったこと」を挙げるならば、GIGAスクール構想が急速に進んだことではないかと思います。「子どもたちの学びを止めてはいけない」という強い意志のもと、「一人一台端末」が実現し、学校のWi−Fi環境が急ピッチで整備され、ソフト面でもハード面でも「教育のデジタル化」が進みました。今も、子どもたちは自由自在にタブレット端末を操り、教員以上に使いこなしている子もいます。

それによって、授業の姿も変わってきています。「いつも、みんなが、同じ問題を、同じやり方で、先生が教える」という従来のスタイルから、「必要なときに、それを考えたい人が、自分の興味・関心に応じて自分の課題を設定して、自分のやり方で、自分で考える」というスタイルに変わってきているのです。駒岡小学校は、まだまだ授業改善途上ではありますが、どんどん新しくなっていく現代を、何が起きるか分からない社会を、何が正解か分からない世界を、たくましく生き抜いていく人を育てていきたいと考えています。

とはいえ、学校の存在意義は、「自分で」「個人で」だけでは埋められない「協働性」にあるとも考えています。「一人よりも友達と一緒に考えたほうがうまくいった」「〇〇さんの言葉のおかげで、新しい考えが浮かんだ」といった子どもの声をたくさん聞きます。一人ひとりの考えたいことや考える方法の中で、共に学ぶことの価値に気づいてくれたら嬉しいなと思います。

10年前と比べると、個人の受け取る情報量は530倍になったという話があります。情報処理の速度を考えると、時代はどんどん刷新され、どんどん「昔のこと」になっていくのかもしれません。世の中はどんどん移り変わっていくけれど、ずっと変わらず大切にしたいこと、学校における不変の価値はどこにあるのかを、よく見定めていきたいと思います。

令和6年も、ご支援とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。